

旅する工具屋



第七話：熱狂のハンガロリンクと温泉のホットなアニキ

2014年の夏、大き目な仕事を終えた私は自分の誕生日を自分で祝うべく、土日に1日年休を足して3連休旅行を計画しました。年休取得は済んだものの、悩みどころはやはり行き先です。住まいのあるドイツ近隣諸国はもう制覇しており、3連休ではそれほど遠くにも行けません。考え込んでいたそんな時、ドイツ人の同僚が「F1好きなんだろう？見に行けばいいじゃん」と良いアイデアを与えてくれました。

色々調べた所、7月にちょうど開かれるのはハンガリーGP。そして長年F1を開催している国だけあって、ホテルも航空券も空きが十分にあるうえに価格も通常時とほぼ変わらない事も決め手となって即決しました。行った事が無い国だったので3日中丸1日はF1、その他は観光に充てる事にして、自身の誕生日を祝う豪華な(私にとっては)3連休をブダペストで迎えます。

ドイツからチェコ・スロバキアを飛び越えて空港に降り立った後、ミニバスに揺られて街の中心部に着きました。夏真っ盛りなハンガリーは思いのほか蒸し暑く、土地勘のない街をただ歩くことが好きな私は汗を流しながらひたすらにブダ地区とペスト地区を練り歩きました。

国会議事堂、鎖橋、王宮、ゲッレルート山、マーチャーシュ協会、初日は足が棒になるまで歩きました。世界遺産になっている河岸の夜景は感動的に美しく、この「ドナウの薔薇」が文章や写真で伝わらない事が誠に残念です。



夕飯を食べ終え、夜風にあたりながら河岸を散歩していると、高級ホテル前の人だかりに目を奪われました。話を聞いてみるとF1関係者が宿泊しているので待ち伏せしているとのこと。試しに待つこと5分もしないうちに、Red Bullの代表クリスティアン・ホーナーと空力の天才エイドリアン・ニューウェイが出てきました。人を掻き分け大興奮で2人と握手しながら翌日の健闘を祈り、ブダペストの夜は更けてゆくのでした。

翌日、市内メトロ駅横のバスターミナルからシャトルバスでハンガロリンクへ。やはりF1開催経験が多いだけあり、シャトルバスの本数も十分で各移動箇所の案内がとても分かりやすかった事が印象的です。臨時のバス停到着後は、強い日射しの中を歩いて自分の席へ。到着した時点で既に汗だくでしたが、誕生日を祝う旅と言う事で奮発してグランドスタンドのスーパーゴールドチケットを買っていたお陰で、以降の観戦は屋根の下で行うことができました。

レースは突然の大雨の後、セミウェットからのスタート。前夜にエールを送った RedBull の若手のホープ・リカルドが優勝し 2 位にタイヤを使い切ったアロンソ、3 位に苦戦を強いられたハミルトンが入賞しました。表彰台近くまで行くことができた私はポディウムで喜びを爆発させる勝者たちを見ながら、伝統あるハンガロリンク(レーサーには不評ですが)と欧州のレースに対する情熱を全身に浴びる様にして満喫しました。

歩きっぱなしの 1 日目、F1 に燃えた 2 日目はあっという間に過ぎて、そして最終日。近くに温泉が沢山ある事を知った私は夕方のフライト前に旅の疲れを癒しにゆくことにしました。ローマ帝国時代から続く(らしい)リハビリ施設も兼ねた温泉を選び、ホテルから徒歩で移動。受付で一通りの説明と、外国人ビジター向けの注意点を聞いてから中へ。水着に着替えて場中に入ると濃い硫黄の匂いが鼻に届きます。

浴場はとても広く、流れるプールの様な冷水の中で身体を動かせるエリアから日本的な熱いもの、ミストサウナ、リハビリ用の水槽の様な 4~5 種類に区分けされていました。久しぶりの熱い風呂に心惹かれた私は迷わず日本的な湯船に浸かり、唸り声を出して湯に沁み入りました。



立ちのぼる湯気、温泉の香り、ブダペストにいる事を忘れて湯船に身を任せていると、一人の男性が後から入ってきました。ギリシャ彫刻モデルの様な筋骨隆々とした白人の彼は浴槽の中央部に仁王立ち・無表情で立ち止まりました。その時、「円形浴槽の真ん中に一人で立つのは、同性のパートナー募集のサイン」という入口で聞いた言葉が脳裏をよぎったのです。

温泉気持ちいいね、程度の声をかけようかと思っていた矢先に思い出された言葉。とたんに角刈りのアニキが「そう」なのか「じゃない」のかわからなくなってしまいました。私個人的には違って欲しかったところですが、確かめるのも失礼な話ですので十分に暖まったところでサウナに移動し、真水で身体を流してロッカーに戻りました。

芯まで暖まり軽くなった身体に新しいシャツを着て、入口に戻る通路からふと流れるプールを横目に見た時、私は自分の目を疑いました。あの無骨なアニキが輝く笑顔で流れるプールを流れているのです。しかもその胸にはがっしりした別の男性が抱きかかえられており…。

衝撃のあまり 3 度くらい見返し、やはり同一人物であることを確認した私は考え込みながらメトロの駅まで歩いてゆきました。あの少年の様な笑顔、まさに「悦」といった雰囲気、きっと彼はお目当てのパートナーを見つけのでしょう。

旅慣れるにつれ、現地に行く前の準備がラフになったり「行ってから考えればいいや」等と思ったりします。大抵の場合、その方が現地の生の姿を見られたり予期せぬ事態を楽しめたりするのかもしれませんが。しかしこのブダペストの旅は、最後に旅先の「マナー」を覚えることの大切さを教えてくれた様に思います。

文：ペンネーム 17chandler